【座談会】

LEC 会計大学院修士論文指導の軌跡と論文作成の意義

― 税理士試験税法一部科目免除認定修了生による座談会 ―

（後列左から　琉子氏　平本氏　村田氏　小林氏　　前列左から　春日先生　慶松先生　山本先生）

LEC 会計大学院修了生		（敬称略）
	2012 年修了	村田顕吉朗
	2013 年修了	小林義之
	2013 年修了	平本和枝
	2013 年修了	琉子敬仁
LEC 会計大学院教員		
	特任教授	慶松勝太郎
	教授	山本宣明
	講師	春日潤一

開催日　2014 年 1 月 8 日（水）

１．はじめに

山本　LEC 会計大学院が税法修士論文の指導を始めて 4 年目を迎えているわけですが、本大学院で論文を書き上げて税理士試験科目の免除申請をした修了生はこれまで全員免除を勝ち取っています。このような成果を受けて口コミが広がっているのか、本大学院の入学志願者の反応も、以前は「試しに話を聞いてみよう」という程度だったのが、最近では「LEC 会計大学院は良いらしい」という意識に変わってきているように思っています。

そこで本日は、こうした LEC 会計大学院における修士論文指導の実態をもっと多くの人に伝えたいということから、この座談会を企画しました。皆さんには、ざっくばらんに、本大学院の実態を語っていただきたいと思っています。

全体の流れとしては、まずは本大学院で修士論文を書いた経験を皆さんに振り返って頂き、続いて、本大学院で論文指導方法論として採用しているマイルストーン管理に関して、実際に修士論文を書いた側としてご意見をお持ちと思いますのでそれをテーマに、最後に、どうも巷では税法修士論文を書くことに対する偏見のようなものがあるようですので、それを打破するためというわけではないのですが、税法修士論文を書くことの意義について考えてみたいと思います。

２．修士論文執筆体験を語る

LEC でのつながりから独立へ

山本　まず、村田さんはいかがでしたでしょうか？

村田　2010 年に入学し 2012 年に修了しました。論文は、春日先生にかなり見ていただき、所得税 56 条について書きました。もともと税理士試験には 3 科目合格したところで入学しましたので、修了後すぐに国税審議会に修士論文を提出して、修了した年の 8 月に税理士登録をし、そのまま開業という形で今は四ツ谷に事務所を構えています。もともと相続や資産税関係の多い事務所に勤めていて、今もそういったことを主に扱っています。事務所は私を含めて 5 名で運営しています。

山本　村田さんの免除申請はかなり早かったですよね。修了式の次の日だったでしょうか。

村田　そうですね。本当は修了式当日に出せるように準備していたのですが、何か必要書類がひとつすぐに出ないとのことで、その書類を待ってすぐに国税庁へ提出しました。

山本　そこから免除認定の結果が出るまでも早かったですよね。

村田　5 月末に免除認定の結果が出て、6 月に

税理士登録の申請をして８月に登録という流れでした。

山本　確か、村田さんともうひとりの修了生がほぼ同時期ぐらいでしたよね。

村田　そうですね。第一号を狙っていました（笑）

山本　四ツ谷で事務所を開かれたのも、大学院で知り合った方とのご縁があってということなんですよね。

村田　もともとは四ツ谷には縁もゆかりもなかったのですが、本大学院で同期だった方に、勤めている会社の一部のスペースを使って良いよということで貸していただき、今に至ります。

山本　そういう意味ではラッキーでしたね。市ヶ谷などは公認会計士の先生も多いみたいですが、四ツ谷もなかなか良い立地ですよね。

村田　交通の便もとても良いです。しかも四ツ谷駅の目の前なので、ここに構えられて本当に良かったです。修了式のあとに、二次会、三次会、四次会と飲みにいったんですが、その最後の店で、たまたまその同期の方に独立の話をしたら、じゃあうちでどう？という話になったんです。本当に不思議な縁だなと思います。

大学院で議論する楽しさ

山本　琉子さんはどうやって LEC 会計大学院をお知りになったんですか？

琉子　私の勤め先の同僚が、1 年先に LEC 会計大学院に入学していたので、その彼からの紹介がきっかけでした。私は高卒なので、そもそも大学院に入学することを考えていなかったのですが、彼から高卒でも入学できることを聞いて、受験に挑戦し入学しました。今となっては、彼には感謝してもしきれないですね。

春日　琉子さんは発表会の場や、論文をつくっていく過程での教員との議論など、すべて楽しんでやっているように見受けられました。

琉子　議論することはどちらかというと好きなんだと思います。他の人の考えを知りたいという欲求が強いので、他の学生の発表を聞くことが好きでしたし、先生方の議論も、私の考えに対する先生方の考えを聞くことができたので楽しむことができました。当初は否定されることが多く、重い雰囲気を感じましたが、その分肯定されると嬉しさを感じました。先生方との議論は本当に良い経験をさせていただいたと思っています。

平本　琉子さんの序論などの発表、すごく参考にさせていただきました。琉子さんの発表を聞くと自分のどこがいけないのかが良く理解でき、とても助けられました。

山本　そういう意味では、他の方の発表を聞くというのはとても参考になりますよね。

琉子　山本先生は覚えていないと思うのですが、序論を書いている時に「ネガティブリ

スト」、「ポジティブリスト」という言葉を拾っていただき序論の方向性を示していただけたことが、先行研究を渉猟する際に非常に助かりました。

山本　手当たり次第に調べるというよりは、ある程度方向性を定めて、その中で必要な限り絞って資料を集めていくほうが、働きながら修士論文を作成するということを考えると良いと思いますし、それが重要なのだと思いますね。

琉子　山本先生に論文の方向性を示していただいたので、先行研究の検討の段階では、春日先生の提案する論文カードをひたすらつくりました。山本先生から、論文に引きずり込まれてしまうから、論文は全部読んではいけないと指導を受けていたのですが、それが全くできず、最初から最後まで漏れなく全部読んで、完全に引きずり込まれていました（笑）ただ、読んでいるうちにこれは同じ主張をしているからいらないなとか、ハウ・ツー本だからいらない、などがだんだんわかるようになってきました。

山本　そのやり方で良いと思うんですよね。ある程度読み進めていくと、考え方や主張が似ているものがあるので、それさえ見えてしまえば読み込みが進み、理解が深まると思います。

慶松　なかなか難しいところですよね。はじめはあまり丁寧に読まずに、ざっと読んである程度先行研究の分類ができれば一番良いのですが、少し見ただけでは一体何が書いてあるのかよくわからないでしょう。そうするとある程度突っ込んで読まなければいけなくなるというジレンマがある。そこが難しいところですよね。それも慣れの問題です。ある程度慣れてくると、読み飛ばしても要る要らないがわかるようになってきます。

琉子　最初は論文に完全に振り回されていました。1 つ論文を読むと、この結論正しいなと思い、その論文に反論している論文を読むと、こっちのほうが正しいなと思ってしまい、ずっといったりきたりしていました。

慶松　たいがいの方が最初はそうだと思いますよ。

山本　琉子さんのテーマは、公益法人でしたね。

琉子　収益事業の範囲の話です。論文作成の過程で、論文の展開について、自分のやりたいことと先生の示す方向が違うとなった時は、食い下がってはいましたが先生の示す方向に従いました。最初は「私が考えていた方がいいと思うけどな」と思いながら、泣く泣く先生に従い訂正していましたが、訂正を進めていくと新しい景色が見える感じがして新鮮でしたし、訂正が終わると、私が当初考えていた展開よりも良くなっていることをいつも実感していました。

この繰り返しをしていくうちに、先生の示した方向に素直に従うことが論文完成の早道だと考えました。それが正解だったと思います。

慶松　琉子さんの論文は、論文としてはきちんと筋が通っているのですが、国税庁があのような論文を OK するのかという点は少し不安がありました。というのは、彼の論文で一番大事な部分は、彼独自の収益事業の判定表をつくり、それによって判断することを提案するというもので、それを認めてもらえるのかという心配があったからです。でも、審査を無事通ったので安心しました。それで今、別の方が所得税で所得区分の判定表を作成したものを提出する予定ですが、琉子さんの例があるから大丈夫かなと思っています。

山本　我々としては、国税庁に提出し免除認定されるかどうかというのは、実績の中でわかっていくところがありますね。

琉子　慶松先生が不安だったという話は、免除通知をもらったあとに先生からお聞きしたので、通知をもらう前に聞かなくて良かったなと思います(笑)

慶松　論文を提出するという点については、2010 年入学組がはじめてだったでしょう。その当時は、国税庁に提出した時にどのレベルの論文なら合格するのかということが全然わからなかった。今はもう 25 名（2014 年 3 月現在）の合格者が出ているので、そのあたりはだいたいわかってきているし、ややうぬぼれていえば、国税庁では LEC 会計大学院の論文は結構良いという評判になっているかもしれない。当時は、どのぐらいのレベルなら合格するのかがわかりませんでしたが、今はこれまですべて合格という認定になっているので、逆にどのレベルなら不合格になるのかがわからないのが悩みになっています。

論文構想を徹底的に揉む序論作成

山本　小林さんは、どのような経緯で本大学院に入学されたのですか？

小林　私は、税理士試験の 3 科目は試験で受かっていたのです。最初の科目は学生のときに合格しました。ただ、その後年々難しくなっていて、30 歳過ぎてくると、仕事は面白いしそれなりに評価もされるので、別に資格がなくても、それなりに稼げるからよいと思うようになっていった訳です。でも、40 歳を過ぎてきた時、業界としては先が明るいわけではないし、ある日社長にお願いをして地元に帰るということを伝えたのです。その後、その時の社長から「こんなの来ているぞ」ということで、大学院の案内を目にしたのです。3 科目持っているし、論文を書くという方法もあるのかと思い、これでもしかしたら人生変わるかもしれないと思いました。それが僕の人生の転機ですね。

面白いのがここからで、その案内は実は

LEC 会計大学院のものではなく別の大学院のものだったのす。それで、その大学院の説明会に行きました。ただ、あまりピンとはこなかった。というより、周りの若い人達を見て、この中で戦って論文が書けるのかなと思ったんです。それで、そこはやめました。それで、他に大学院がないのかと思いインターネットで検索して、LEC 会計大学院を見つけたんです。早速連絡をして事務局の方と話をして説明を聞いて、教室を出る時には、会社を辞めてこの大学院に行こうと決めていましたね。それが、LEC 会計大学院との出会いでした。

春日　実際に本大学院に入学されていかがでしたか？

小林　2011 年春に入学して最初の半年間では論文とはどのようなものかという講義を受けたあと、論文で書きたい題材についての序論を書いてくるという課題が夏前ぐらいにありました。その時に良く覚えているのが、学生が何十人か提出した中で、先生方から、今回提出されたものはほとんどダメで、しいて言えば琉子さんが一人合格ぐらいかなという話があったんですよね。その時は、自分がいきなりダメグループに入れられて「なんでだよ」と思いました(笑)そのあと序論発表会があったのですが、今思えば、あの頃はダメな論文がどのようなものか全然わかっていなかったなと思いますね。

今の学生に言いたいこととして、論文を書くことを希望して入学するのであれば、題材を 3 つか 4 つぐらいは考えてから入学したほうが良いですよ、ということです。論文が何か、ということはわからなくても、日頃から税制について疑問に思っていること、理不尽に思っていることが 3 つぐらいはないと、論文を書いていくうちに途中で心が折れておれちゃいますよと。

山本　小林さんも論文を楽しんでいた印象がありますね。だって、論文が森鴎外からスタートするんですよ。

小林　お医者さんの税制について書いたんですよね。論文の最初につかみが欲しいと思ったんです。そうした時、歴史を調べていくうちに、お医者さんだった森鴎外が医者の所得に税金をかけるとは何事だと主張している文章を見つけたんですね。それで、それをトップにもってこようと思って、つかみとして使いました。そこの部分は指摘されていないのですが、春日先生から、あなたのは論文の口調じゃないという駄目出しを受けたのを覚えています。その時はどこがダメなのかと思ったのですが、この前、論文のやり取りをしていた頃のメールを見返して、当時の自分の文章をみて、これは論文じゃないなと思いました(笑)

山本　それは大事なところで、やはり人によって文章のテイストがありますよね。これは本当に千差万別で、論文モードに切り替

えていくというのはとても難しいんですよね。

小林　私は素材を全部山本先生に投げたんですよね。料理で言えば、肉とか野菜とかを切り刻んだものを山本先生に投げたら、山本先生が組み立て方をアドバイスしてくださって、自分で仕上げることができました。今、論文で止まってしまっている方がいるとすれば、その材料がうまく準備できていないのかなと思います。食べられないものなどが入ってしまっているんだと思いますね。

琉子　止まってしまっている方たちは論文を読めていないような気がしますね。先行研究の筆者が本質的に何を言いたいのかを理解しないまま書いてしまうと、結局主張もはっきりしないものになってしまうのだと思います。

慶松　さっきの話でいうと、修士論文の書き出しは、吾輩は猫であるでも構わないわけですよ。でも、そこからスタートして、ちゃんと話をつなげることができるのは名人級の仕事なわけで、今指導しているように、対象は何で、目的は何で、というように書いたほうがわかりやすいのではと思います。

序論については、かなりうるさく指導していると思いますが、皆さん、何で序論でこんなに口うるさく言うのだろうと思いましたか？

平本　それはやはりありましたね。序論を書いて発表していた時は、皆の前でつるし上げにされている気分でしたね(笑)でも、序論がちゃんと書けていなかったら最後までいけていなかっただろうなと思います。書き終わってからすごい実感しましたね。

琉子　序論をやっている間はつらかったですね。でも、先行研究の検討に入ったときに、序論ができていない方はどうしようもないのではないかなと思いました。序論をはじめに完成させることは絶対的に必要な気がします。じゃないと、結果的に自分のテーマに関係のない文献ばかり読んで時間を無駄にしてしまいますよね。

山本　完成された方はおそらく皆そういう思いを持っていますよね。村田さんからもそのような話を聞いたような気がします。いちばん早く序論を終わらせて、一度仕事に戻られて、それでまた論文をはじめるという流れでしたよね？そういう意味では、村田さんの場合は序論を書いている時点である程度論文全体のイメージがあったのではないかなと思います。

村田　私たちはどうしても税の内容に突っ込んでいってしまうのですが、論文には、主張したい意見があって、それに対する肯定、反対意見があって、それらを踏まえて自分の結論を強化して、整合性を取りながら結論に落としこむという流れがあると思うんです。この型が大事だと思っていたので、この型にどう材料を当てはめていけば形

になるのかを考えていました。僕の場合は特に、絶対にこうあるべきだ、みたいな譲れない強い主張があるわけではなかったので、論文の型というものを意識していました。

結論をめぐる教員との真剣勝負

慶松　小林さんから少し話がありましたが、皆さん論文というものがどういうものなのか、だいたい最初からわかっていたのか、書いているうちにだんだんわかってきたのか、どちらですか？平本さんはいかがですか？高校で小論文書いて、大学で卒業論文書いて、それで修士論文を書くというステップを踏んでいればイメージはしやすいのでしょうけど、卒業論文を書かない人も多いわけで、そのあたりはどうですか？

平本　最初は論文とは何かというイメージは全くなかったんです。ただ、論文を書かないと税理士になれなかったので、論文執筆に力を入れて指導してもらえるこの大学院を選びました。とにかく最初から、序論て何？という状態だったので、本当に戸惑いばかりでした。先行研究検討の段階でも、先行研究て何？という状態でした。そこで、とにかく真似をしてみようと思いました。有名な先生の論文を読んでみてその流れを確認することだったり、他の方の序論の発表を聞いてどうすれば序論になるのかを真似るということだったりをしていました。書きながら覚えていっていました。どのような流れの文章にすれば論文になるのか、最初は本当にわからなかったですね。ここに入って教えてもらって、はじめて論文というものを知ったという感じです。でも、それでも書けたんですよね。大学も出ていないですし、それは本当に自分でも驚きでしたね。一番悩んだのが結論の書き方で、はじめは自分の思ったことを書けば良いものだと思っていました。そうしたら、主査の木村先生から、そうじゃないよと指導を受けまして、そこではじめて自分の気持ちを書けば良いのではないということを知りました。

慶松　自分の気持ちを書いても良いのだけど、気持ちを書いたってことがわからないようにうまくごまかさないと(笑)

平本　そこまでの技術はありませんでした(笑)「私はこう思います」という話をしたら木村先生に僕はそうは思わない、ということを言われ、なぜそうは思わないのかを木村先生に説明していただき、条文などを確認すると確かにその通りだなと思いました。それでこれではいけない、もう少し結論を考え直さないといけないというところから始めたんですね。結論はかなり最後まで苦労しました。最後まで結論が定まらなくて。ただ、最後に、この結論なら OK ですと言われたときにはすごく嬉しかったです。

春日　最初に木村先生から否定された結論と、最終的な結論を比べたときに、自分の中では何が違っていたと思いますか？

平本　当初の結論はじつは結論ではなくて、自分の意見を押し付けていただけでしたね。本論部分で論じてきた結論の根拠と結論につながりがなかったのだと思います。結論までの流れがあるのに、結論だけが切り離されて私の気持ちみたいな感じでした。

山本　そういうことは多いんですよね。

平本　せっかくここまで研究してきたのだから、それらの議論を踏まえるとこのような結論になるという形で書かなければいけない、ということを木村先生に教えていただいたという感じですね。

山本　それは非常に貴重なことで、今のマイルストーン管理では序論を書いたあとにすぐに結論を書いてもらうんです。そうすると、だいたい結論だけ切り離されてしまいます。結論を言う時に、どういう流れで、どういう理由でその結論を主張するのかという部分が欲しいのですが。

琉子　序論を書いている時はすごく熱くなっていると言いますか、自分の思いが強いんですよね。それで、そのあとにだんだん冷静になってきます。

慶松　ただ、熱くなるということもある面では必要なんでしょうね。そうじゃないとつまらないもんね。

本論部の完成

平本　結論を書いている時、春日先生は６人いっぺんに読んでいるではないですか。あれはどういうふうに頭を切り替えているのですか。自分の論文を見直して修正するのすら本当に大変なんですけど、多くの学生がいる中で見て添削していただいたことは本当にありがたかったなと思います。

春日　各マイルストーンに沿って、序論、結論、本論など、皆さんそれぞれの段階に分かれて論文を書いているので、この段階の最初のほうでは、じつは私も正直皆さんの話がよくわかっていないんです。なので、早い段階では一文単位で文章をチェックしているだけという感じです。そして、皆さんのドラフトを繰り返しチェックする中で話の全体像をだんだんと理解していっていると思います。こうした指導経験を繰り返す中で、徐々に自分の中でもやり方が確立されてきています。半期毎の積み重ねを続けていけば１日に６人とかを見ていても、この人の論文はこういう話だなというのが頭の中に定着してくるので、対応できるようになりますね。

山本　書いている人の意図が見えると早くなるんですよね。この人はこういうことが主張したいというのを認識できた途端に、一気にまとまります。それがつかめないと、その人は何を考えているのかがわからないですよね。

春日　本論の構成でも、その点が見えてこない人が中にはいて、それがわかれば章の構成など、話を作る手伝いをすることはできるんですが、もともとの材料が揃っていなかったり、材料の書き方が混乱状態にあると非常に苦労しますね。

山本　こうしたことが起こる理由には、たぶん、論文が流れとして結論に結びついていないといけないということが理解されていないことにあります。何か書けばそれで良い、というようなことをずっと思っている学生もいて、そういう人と対話するのはとても大変です。論文は流れなんですよ、と話をしてその場では「わかりました」とは言うのですが、いざ文章を書くと何を意

図しているのかわからないということは結構ありますね。それから困るのは、先行研究の検討といった時に、検討になっていないという時です。多いのが先行研究の羅列です。

琉子　先行研究の検討は結構面白いと思います。穴を探すといいますか。その人の主張の欠点を見つけることができると嬉しいんですよね。

小林　それはあまり性格良くないよ(笑)

琉子　そうです、腹黒いんです(笑)それで先行研究の検討がだんだん好きになっていきました。春日先生にも一度その点をほめられて、腹黒くて良いんだと思いました。

慶松　先行研究の検討を何のために行うのかを考えた時に、先行研究は自分の論文を書くために利用するのだ、という概念があまり皆さんの中にはないんですね。先行研究は、自分の結論を補強するために使うとか、琉子さんが言ったように穴を見つけてその論文を批判することで自分の論文の妥当性を主張するといったふうに、利用のしかたを考えなければいけないのかなと思います。先行研究で「こう書いてありました」というだけでは、「良く勉強しました」というだけであって、「それでどうなるの？」ということになってしまいます。

仕事・家庭と論文執筆の両立

平本　振り返ってみると、論文を書くのは楽しいとみなさんおっしゃっていましたけど、私は本当に苦しんでいましたね。春日先生にも、私もう潰れそうですみたいなメールを送っていました。

慶松　2 年間で、仕事しながら授業科目の単位も取って、論文も書くというのは本当に大変なことですよね。みなさん大したもんです。

小林　村田さんも仕事されながらやっていたんですか？

村田　はい、していました。

慶松　村田さんはわりと涼しげに書いていたよね。

村田　いえいえ、仕事しながらは結構しんどかったですよ。平日は仕事をして、1 時間通学し授業を受けて帰って寝るだけという感じで、土日も授業の合間に論文を書かなければいけないので、体力的にかなりタイトで、つらかったです。ただ、終わってみると達成感が大きくて、大変だったことはあまり覚えていないですね。やって良かったですし楽しかったです。

山本　2011 年度は 2010 年度生の蓄積があったので、マイルストーン管理が少しフォーマット化された感じでしたが、2010 年度はすべてが試行錯誤でした。その中で、村田さんの場合はスムーズに進んでいったというイメージが私の中にもあります。

村田　それはきっと僕があまり相談などに行かずに好き勝手に書いていたからじゃないでしょうか（笑）でも、時間ができた時や休みの日などは、中野にある租税資料館や大崎にある租税図書室に行ったりして相当こもっていました。そういう意味では、時間はかなりかけたと思いますね。授業と仕事がない時にはほとんど論文に時間を使っていました。

慶松　村田さんは仕事もしながら大変だったということですが、平本さんは、仕事して主婦で母親で、授業科目の単位も取って論文書いて、しかも成績も優秀で、どのようにやりくりをしていたの？

平本　論文に集中すると寝るのが 3 時、ということは結構ありました。ハイテンションになっているので何とかなってしまうんですが、本当に最後の一か月は「わたしい

つ寝ているのだろう」という感じでしたね。大学院まで来る電車の中は睡眠時間というような状況でしたが、そこまでくると、すごくきつい中でも、その苦しいのが面白くなってきたという感じでした。最後は食事の時でもどんな時でも結論のことを考えている感じでしたね。実は私が論文を追い込んでいた時期はちょうど娘の大学受験の時期だったのですが、娘のこともほったらかし、家のこともほったらかしで(笑)ここで完成できなかったら、また半年や1年延びるということで家族を言いくるめて、家族に我慢してもらって、協力してもらいました。ただ、仕事の時間が一番きつかったです。仕事をしながら結論を考えるわけにはいかないので。入学した時の私の最大の目標は、2 年で絶対に修了するということでした。それと春日先生のグループ内全員で修了するということをお互いに約束もしていたので、1 人だけ残されたくないという一心でしたね。今、振り返ると苦しくて忙しくて、何でこんなことしているのかなと思うこともありましたが、やはり楽しかったなと。

教員の指導の特色

慶松　我々論文指導担当教員の指導についてはどのような感想を持ちましたか？

小林　二年間の在学中、指導教員が半年毎に替わりました。今思うと三者三様の感があり、私の場合、最初は慶松先生、次が春日先生、最後纏める段階は山本先生でした。先ほどの料理の話で考えると、材料をざくざくっと切ってお願いしますとやると料理がぽんと出てくるのが山本先生。春日先生と慶松先生の 2 人は似ていて、それはこういう風に作るんだという示唆を与えてくれる。逆にいうと、お尻に火がついてしまっていると、それだとこれからまた練り直すのかということになってしまうことがあるので、山本先生が最後で良かったなと思いますね。

慶松先生も山本先生も春日先生も、税法については正直そこまでお詳しいわけではないじゃないですか。でも、税法についてわからない人から、この文章ならわかるよと言ってもらったほうが良いですね。かなりの前提知識がないと読めない、という文章は論文ではないわけですから。ちゃんと税法専門の教員がいて、もう片方では税法の専門家ではない方に文章を精査してもらう、この両輪が良いですよね。いろいろな視点の教員がいるというのが良いと思います。

琉子　この点は、他の大学院とは決定的に違うところですね。他の大学院ですと、指導の先生の色にどうしても染まってしまうと思うんです。なので、そこが LEC 会計大学院の一番の強みだと思いますし、是非今後もそれをお願いしたいなと思います。

平本　山本先生に序論を見ていただいた時、「誰にでもわかるものにしないと」と言われて、それで琉子さんの序論を見て思ったことは、これなら誰でもわかるし、次に読みたいと思うな、ということでした。そういう指導はやはり良いです。最初は、所得税や法人税の試験の理論問題を書くイメージで論文指導を受けていたのですが、その一言で「そうではないんだ」と気づかされました。理論問題は税法を単に書き並べるだけなのですが、「そうか、誰にとっても読みやすくてこの先読みたいと思わせなきゃいけないんだ」ということがわかりました。税法専門の先生だけですとそういう指導はしていただけなかったかもしれません。

山本　他大学院の修士論文を見ても、これだと説明になっていないなと感じるものも結構多いですからね。

慶松　国税庁に提出することを考えた時に、序論を読んで面白そうだと思ってもらえれば、それはもう半分は成功なんですよね。

村田　わからない人に説明するということは、実務的でもありますよね。

慶松　その点は非常に重要で、我々文章指導担当教員はどちらかというと税法に関しては素人でしょう。でも、一般の何も知らない人よりはこの 3 人は少しはわかる。ですからこの 3 人が読んで内容がわかって面白いな、と思えば、世の中どこにいっても通るだろうなと思うわけです。

３．今後の税法修士論文指導

論文の合格水準

小林　ところで、本大学院で税法免除の修士論文指導を始めたのは 2010 年からで、どのような論文が国税庁に免除認定されるのかわからないところからのスタートだったと思いますが、先生方も指導されているときは、その点は怖かったのではないですか？

山本　正直に言うと、このレベルで合格にならないはずはないと思っていたのが私の本音です。本大学院の修士論文のレベルが否定されたら、ほとんどの大学院の修士論文はダメということになってしまうだろう、と思っていました。有名大学の修士論文でも落ちているという事実を最近は聞きます。データが公表されている訳ではないですが、仲間内の先生同士でそういう話は聞くようです。

小林　現在の本大学院の論文の合格ラインはとても高いと思うんです。100 点満点のだいたい 90 点ぐらいというイメージでしょうか。これが例えば、60 点ぐらいでも国税庁の審査は通る、ということがわかれば、そのラインを 70 点とかに少しずつ下げていっても良いのではと思うんですよね。働きながら論文を書いている学生がほとんどなわけですし、それができれば学生にとっても良いことではないでしょうか。論文完成のために修了を延期している人たちの指導を甘くして合格させてあげたほうが良いとは絶対思わないのですが、国税庁の審査基準が少しずつわかるようになってくるのであれば、本大学院の論文の合格水準について検討していただけたら、とは思います。

論文テーマの対象税目

山本　現状、論文テーマの切り口の多様性をどう広げるのかが重要になってきていまして、逆に我々教員側が試されているのではと感じたりもしています。それから、今議論しているのは、所得税や法人税以外の税目にも視野を広げていこうということです。例えば、消費税や相続税などですね。

村田　例えば、課税単位の問題などは相続税と非常に親和性があるものだと思っているので、そのあたりで広げていけるのかなと感じています。

琉子　税目を広げるというのは非常に良いと思います。先生方はどの税目がきても対応できるのではないでしょうか。

小林　これまでは、皆さん所得税か法人税のどちらかについて書いているのでしょうか。

山本　大体そうです。相続税を部分的に絡めた学生も若干いますが。

平本　実際、私の事務所で消費税について書

かれた方がいらっしゃいます。ただ、消費税は改正が多すぎて、論文を書く題材としては難しいような気がしますね。また、たばこ税や酒税などは判例がないに等しいですよね、おそらく。そういう意味では論文として書きづらいのかなと思います。

山本　そうですね、文章量は増やしにくいですよね。

琉子　相続税は広がりそうですね。テーマにしたい人がたくさんいるのではないでしょうか。

山本　確定申告の無料相談会などでは、相続税関連の相談が非常に多いと聞きます。しかも、極めてセンシティブな問題ですからね。判例もたくさんあるのではと思います。

琉子　ドラマチックな判例とかありそうですよね。

村田　本大学院の説明会にいらっしゃる方でも、相続税で論文書けないかと聞いてくる方は結構多いですね。

慶松　税法の先生なら、税法の基本的な考え方はわかっておられるから、そういう意味では、今は厳密に分けすぎているのかなと感じています。それから、私がやっていることといえば、ほとんど皆さんが書かれているものだけを見て、それで判断しているということです。材料のつなぎ方が良くないとか、論点がずれているとか、そういう点を見ています。結論が決まっている時は、その根拠が明確だということをきちんと見せてくれないと論文としては成立しません。もちろん、例えば所得税法 56 条や法人税法 132 条などのように、よく問題になる論点についてはわかりますが、税法については素人なので本質的にはこのような考えでやっています。したがって、少なくとも学生が持ってくる材料については、正しいものを持ってきてもらうことが必要になりますね。

山本　材料が間違っていると、我々としてはどうしようもないところがありますからね。

慶松　どうも怪しいなと思うところは税法を見ますが。

山本　結論へのつなぎ方が学生にわかってもらえない、理解してもらえないというのは悩みとしてはあります。入口と出口は一致させなければいけないので、それなりの理由や根拠を準備してつなぎあわせなければいけないんですが、そこが欠落していることがあったりします。

マイルストーン管理

村田　私の時には、各人の進捗状況が A・B・C・D などのランクに分けられていましたが、今でもそのような進度別の管理をされているんですか？

山本　現在はしていません。2010 年度になかった制度としては、現在は審査日を半期で 3 回に設定しているので、進度が早い人は早く提出して終わることができるようになりました。そのため、進んでいる人、そうでない人というのは何となく伝わるようにはなっていると思います。当時の進捗管理はいかがでしたか？

村田　あの方法は私はすごく好きでした。負けたくないから先にいってやろうという気になりますし、良いなと思っていました。

山本　そういう意味では、情報をできるだけ共有したほうが良いんでしょうね。

平本　私の時には、グループのメンバーと、どこまで進んだかということが常に共通の話題になっていて、先に進んでいる人がいると、それを聞いて焦って私も進むという状況でした。自分の進み具合というか位置がわかるのが良いんですよね。遅れてい

るのか進んでいるのかがわからないのは良くないです。

琉子　先行研究の検討の後に結論がありますが、その間のマイルストーンは特にないんでしたっけ？

山本　1 年半が過ぎるタイミングでプレ結論発表会があり、そこで結論について指摘を受けて、その後の半年は本論を中心にひたすら完成を目指すという感じです。ここの本論執筆が進みづらいのが悩みのひとつかもしれないですね。

琉子　本論執筆で私も含めて進んでいない人が結構いたので。

平本　あそこで差が出てきますよね。

山本　本論の進捗度のようなものを何らかの形で共有できれば良いのかもしれません。

４．税法免除論文を書くことの意義

慶松　個人的興味で聞くんですけが、冒頭で山本先生が言われた論文合格者への偏見ですが、どのような偏見があるんですか？

山本　税理士試験の受験で 5 科目合格して税理士になるのが本当の税理士で、国税庁に論文を提出して免除制度を使って税理士になった人は本当の税理士ではない、というようなことです。

小林　それは昔から言われることですよね。

村田　ただ、それを気にしているのは税理士試験受験生だけだと思います。その証拠に、私が税理士登録してから、何の科目を受験して合格したか、ということや、大学院卒なのか、などは全く聞かれたことはありません。税理士同士でもお客さんにしても。正直、全科目受験合格者か論文合格者かにこだわることは無駄なことだと思いますね。

山本　そういう意味では、修士論文を執筆することの意義をもっと打ち出したいと思っているんです。

琉子　偏見をもっている方たちには、税理士試験は難しいが修士論文は簡単だ、というような意識がどうしてもあるんでしょう。でもそんな意識は LEC 会計大学院では全く通用しません。

山本　論文の質が全然違いますからね。

慶松　税理士試験だと全部自分の力で受けなきゃいけないところ、論文だと教員から指導を受けられるというのは少し違うかもしれないですね。

５．おわりに

山本　最後に、LEC 会計大学院を修了し、現在、実務をされている皆さんとして、この論文執筆の体験から感じておられるメリットなどがあれば教えて頂けますか？

平本　やはり論文を書いて合格したメリットは今すごく感じています。特に、コンサルティングを行う上でメリットを感じていますので、大学院に入学した意味は本当に実感しています。忙しくて時間がなくても、大学院に通うことができたことは自分にとってとてもプラスでした。

琉子　私は、税務調査の議論をする時にすごく役に立っています。根拠をもって意見を言う、相手の根拠が薄ければそこを指摘する、など、これは論文を作成することで得た貴重なスキルだと思っています。とにかく税務調査の時にはすごく役立ちます。

村田　LEC 会計大学院で得たことは 3 つありまして、1 つ目は、税法などの根拠をもって対応するということです。2 つ目は、税法以外のいろいろな分野の勉強ができた

ことですね。先ほどコンサルと平本さんがおっしゃいましたが、経営や金融などの知識を得ることができたのは、経営者の相談相手になるという点では非常に大きいです。管理会計なんて、まさに面白いなと思いますよ。3 つ目は、これは特に独立して実感していることですが、事務所に勤務していた時は自分の考えたことをボスが判断するという後ろ盾がありました。それが独立すると全くなくなり、迷った時には全て自分で決めなければいけないし、責任も自分でとらなければいけない。結局、最後に頼れるのは税法しかないんですよね。迷ったら条文読んだり、判例見たりして判断するしかないので。物事を調べたり考えたりする力は大学院で本当に身についたと思います。大学院で論文執筆に取り組んでいなかったら、独立した時にどうなっていたんだろう、何を頼りに決断を下すのだろうと考えると怖いですね、本当に。

琉子　税理士試験では税法を理論的に学ぶことはできたのですが答えが一つということが前提でした。答えが一つしかないような問題は、今は税理士に聞かなくても大半はインターネットで解決できるようになっていると思います。現代の税理士に必要な能力は、二通り以上の答えが考えられる場合にどうするか判断できることだと思います。そういう意味では、論文合格者のほうが頼りになるのではと思いますね。

平本　税理士試験だけですと、専門分野の税法だけに詳しい、という感じがしますね。

琉子　議論する訓練をしていないので、税務調査の時には大変なのではと思います。誰かに教えてもらった知識や参考書だけを頼りに対応することになると思うので。

村田　通達や質疑応答集など、あっちのほうにたぶん行ってしまうと思いますね。

琉子　以前は、参考書や通達にない問題が起きた場合には、答えを探し求めてあたふたしていましたが、論文に取り組んでからは、そういう問題でも、こういう論理だからこうなる、という考え方が多少はできるようになったかなと思います。

山本　それはとてもありがたいお話ですね。本日は皆さん、本当にありがとうございました。

（完）